

# アウグスティヌスの浪費に関する思想（1）

富貴島 明

## はじめに

アウグスティヌスは、古代ローマ帝国の末期 354 年に生まれ、ローマ帝国の混乱と衰退のなかで思索し、さらに東ローマ帝国と西ローマ帝国の解体を体験し、476 年の西ローマ帝国崩壊の少し前の 430 年に亡くなった学者である。彼は、古代ローマ帝国から中世への移行期に生き、ギリシア哲学とキリスト教思想を結合した神学を創出し、後の中世ヨーロッパ神学の発展に大きな影響を及ぼした思想家でもある。彼は、19 歳の時、ケケロの『ホルテンシウス』を読み、真理への激しい愛に目覚めた。マニ教を信じていたが、32 歳の時、キリスト教に回心する。テオドシウス帝がキリスト教を国教化した 391 年、彼は 37 歳で司祭に就任する。76 歳で死ぬまで、キリスト教の教義を異端から守り、多くの著作を残した。その古代ローマ帝国から中世への移行は、一挙におこなわれたのではなく、社会の構造の変質にともない、徐々におこなわれていったのである。

本稿では、アウグスティヌスが生まれる 354 年までの政治的混乱と社会的退廃、特に本論の中心である浪費の有様を年代順に追いながら、明らかにしていく。（宗教的混乱の状況も記されているが、次稿でまとめて明らかにする。）この混乱と退廃のなかから、アウグスティヌスの思想が生まれたからである。参考にしたのが E・ギボンの『ローマ帝国衰亡史』である。この書は年代を正確にあらわしていない部分もあるので、この書を中心に、そしてその時代の経済史に詳しい、M・ロストフツェフの『ローマ帝国社会経済史』などを参考にしながら、年代順に政治的混乱と社会的退廃、経済的变化の状況を正確にしていく。第 2 節では、アウグスティヌスが生まれる 354 年までの政治的混乱と社会的退廃の状況をまとめてみる。第 3 節では、皇帝や資産家の浪費のすさまじさを見てみる。

## 1. アウグスティヌスの生まれるまでのローマ帝国史

ギボンの『ローマ帝国衰亡史』は、2 世紀のローマ帝国の描写から始まる。ローマ帝国は、五

賢帝の時代(96年~180年)に繁栄の頂点に達した。トラヤヌス帝(在位98年~117年)の時代に領土は最大になった。東西が大西洋を西辺としユーフラテス川を東辺とする3,000マイル余、南北がアントニヌス帝壁とダキア北境を北辺としアトラス山脈と北回帰線を南辺とする2,000マイル余、つまり、温暖の最良の地帯である北緯24度と56度の間にあって、推定面積160万平方マイルを占め、そしてその地域の大部分が非常に良く開拓された肥沃な地(地中海地帯は、浅い表土が豪雨型の冬雨に流されやすく、穀物栽培には不適であった。農作物は、麦類よりはぶどうとオリーブを主作物としている。シチリア、黒海北岸の黒土地帯、ナイルのデルタ、属州アフリカでの穀物栽培は早くから発達した。西ヨーロッパ地方は、農業、牧畜ともに好適の土地であった。)であった。また2世紀は、パクス・ロマーナを享受した時代である。陸海の交通の安全が確保され、経済活動も活発におこなわれていた。属州の農業生産や手工業が活発におこなわれ、イタリアに輸出されるようになっていった。アラビア、インド、中国、東南アジアからは、貴金属、香辛料、絹、珍しい野獣などがもたらされ、ローマの贅沢は拡大していった。(後期ローマの時代になっても、奢侈品の交易は繁栄していた。)

このような帝国の平和と発展を支えたのが軍事力である。軍人となり、国を守ることはローマ市民の義務であり名誉であった。だが征服の進展にともない、一つの職業に堕ちていった。軍人の体力や気力も、都市より地方が、帝国の南方より北方が優れているとされた。特に鍛冶、大工、猟師などの肉体労働に従事した者の方が、奢侈にたずさわる座業のものより旺盛だとされていた。彼らを指揮したのが上流階級出身の貴族たちである。それは、財産による資格が撤廃されてからも変わらなかったのである。兵士は、愛国心でなく、名誉と宗教、恐怖と希望により、蛮族にはない安定感と即応性を獲得し、最強の軍事力を保持していた。軍人とは、実力で地位や名誉を獲得できる名誉ある職業であり、軍人となる宣誓式では、上官の命に服し、皇帝と国家のために命を捧げる誓いがなされた。さらに厳罰という恐怖と、給与、褒賞金への希望が、実戦さながらの軍事訓練の日常化に耐えさせ、兵士として帝国の精気を高揚したのである。

両アントニヌス帝の治世には、宗教政策において、理性的ローマ人は憐憫と鷹揚さがただよう寛容の精神をつらぬいていた。神官の利権や民衆の信仰心には、しかるべき敬意が払われた。様々な信仰や迷信が氾濫したが、いかがわしい儀式が公安に反しない限り、禁止されたり、追放にはならなかった。

ローマ帝国の壮麗なる公共建造物は、人力と財力とを際限なく動かせる歴代の皇帝が威信をかけて建造したものである。皇帝は、自己の富と閑暇を市民に捧げた。アウグストゥスは、「余は煉瓦の都市を見だし、大理石の都市を遺す」と豪語した。豊かになった市民も、気前のよさ、鷹揚さという美德を証明するために、自費で公共物を建造した。両アントニヌス帝時代のアテネの人であるヘロデス・アティクスは、皇帝に劣らない鷹揚さを示し、多くの公共物を建設した。

ローマ帝国の2世紀は、ローマ市以外の属州の都市でも、競技場、寺院、劇場、柱廊、凱旋門、浴場、水道などが華麗に建てられ、街は飾り立てられ、都市化の進んだ時代であった。その結果、属州内に、ローマ風の美しい都市が数多く建設された。そこではギリシア文化とローマ文化の融合した都市文化が開花していった。

ローマ帝国内の道路網は完備し、海上交通も活発であった。外来品種の農作物が導入され、農業も発達した。桃、杏、石榴、シトロン、オレンジ、ぶどう、オリーブ、亜麻などがイタリアやガリアで栽培されるようになった。牧草も栽培されるようになり、家畜の数が増え、また土地も肥えた。灌漑施設も導入された。ローマ帝国となってからは、飢餓はまれにしか起こらなかった。農業以外にも鉱業や漁業も発達し、富裕層の快楽と貧困層の生存を支えた。富裕層の贅沢が、不平等な資産配分の是正に寄与していたといえるであろう。この富の循環が政治機構にも活力を与えていた。贅沢は世界各地の富を求めさせた。スキタイの森は貴重な毛皮のために簒奪され、バルチック海岸は琥珀のために略奪された。バビロンの絨毯、東方の絹、ダイヤモンド、真珠などの宝石類、礼拝や葬礼に使う香料などが、国富を流失させていた。年間の損失額は、プリニウスの計算によれば80万ポンドを上回っていた<sup>(1)</sup>。このような贅沢や浪費をできる人々は、皇帝や皇帝のお気に入りの官僚、そして大土地所有者というほんの限られた資産家であった。大多数の農民、職人たちは、彼らの浪費のために搾取され、窮乏化していった。このような繁栄の影で、危機が迫りつつあった。長い平和による経済的繁栄が、退廃的風潮ともうげな私生活を広め、尚武心までも衰退させていった。ヒスパニア、ガリア、ブリタニアやイリュリウムなどの属州に住む、頑強で勇敢なヨーロッパの先住民、つまりローマ人が軽蔑していた蛮族が傭兵として雇われ、金のために国防にあたっていた。栄達を志す若者は、宮廷か親衛隊に入ることを望み、そこで出世することだけに心を砕き、国のためという公共心は、傭兵と同様になかった。

マルクス・アウレリウス・アントニヌス帝の後継者は、五賢帝時代の慣習を破って息子のコンモドゥス19歳(在位180年~192年)であった。彼は、貴族相手の財物強奪や財産没収で膨大な蓄財をしていたペレニウスに国務を託した。ペレニウスが、軍隊の圧力で死ぬと、クレアンデルが跡を継いだ。彼も、執政官や元老議員の地位を公売にかけることなどにより、莫大な富を蓄積した。主人である皇帝に豪華な贈り物をして喜ばせ、民衆には浴場や体育館などの公共施設を盛んに建設して、不満をそらした。しかし疫病や、彼による穀物独占がもたらした飢餓が、民衆の不満を爆発させ、殺されてしまう。ギボン「知的快楽に対する趣味を欠いた最初の皇帝」と記している<sup>(2)</sup>。後宮には300人以上の美女と少なからぬ数の美童が住み、多くの時間を淫虐に過ごした。拳闘士の試合と野獣狩りを特に好んだ。暴状や悪名も彼をもってきわまる。そしてコンモドゥス帝自身も毒殺されてしまう。

193年1月1日、新しい皇帝に推されたのが首都長官のペルティナクスであった。しかし3ヶ

月で自分を推戴した近衛隊により殺害されてしまう。近衛隊は、帝位を競売にかける。これを落としたのが、裕福な元老院議員のディテウリス・ユリアヌスであったが、在位 66 日で、近衛隊により殺害されてしまう。

次の皇帝は、上パンノニア総督のセプティミウス・セウェルス（在位 193 年～211 年）であった。ヨーロッパ出身以外の最初のアフリカ人皇帝であった。彼は、イタリアと属州の権利を同等にした。彼は、アントニウス帝からの伝統である近衛隊はイタリア出身の兵士のみで構成されるという規則を破った。古い近衛隊を解散し、それを属州の軍隊から選抜した兵士（ほとんどはドナウ地方出身）に置きかえた。彼は、元老院と属州貴族たちが敵対していたので、自己の支持基盤としての軍人を優遇せざるをえなかった。元老院の権限を縮小した。皇帝の手足として働く官僚や軍人を増やしていった。特に、兵士を増やし、富ますことで、皇帝の権力を維持しようとした。給与の増額、賞与金の付与、退役兵特権の保護、現役兵の結婚の容認などの優遇策により、近衛隊は 4 倍の 5 万人に増えたが、軍人達は弱体化していった。兵士たちは結婚し、兵舎から辺境部落に移り住んだ。指揮官に蛮族を多く登用した。兵士たちは、さらなる金を皇帝に要求した。兵士を富ます資金は、没収と賦課金によりつくられた。この資金を、都市の支配権を強化することと統制経済によりつくりだそうとした。このことが、民衆を疲弊させることになった。そしてローマ帝国は退廃と衰退の道を進むことになる。ギボンが、このセウェルス帝こそ全面的退廃と衰退の張本人だと指摘した<sup>3)</sup>。

202 年、セウェルス帝は、キリスト教への改宗を禁止し、キリスト教徒を迫害する。この頃までに『新約聖書』が成立し、キリスト教がローマ帝国全土に広まっていた。

203 年、セウェルス帝を記念する凱旋門が建てられる。神学者オリゲネス（185 年～254 年）は、クレメンスの後を継ぎ、アレクサンドリアのキリスト教教理学校の校長となる。

211 年、セウェルス帝が病死する。カラカラと弟のゲタが共治皇帝となる。

212 年、カラカラが弟を殺し、単独皇帝となる。ゲタの友人というだけで 2 万人以上が殺されたといわれている。彼は恐怖政治をひいた。そして「兵士には十分気をつけよ」という父の遺言を守った。軍隊の忠誠と支持を購うために兵士の給与と年金を増額した。同年、「アントニウス勅法（告示）」を発令した。（この勅法が、ローマ市民が支える自立的都市国家から専制的国家へ移行された、といわれている。）帝国の全住民にローマ市民権を付与し、相続税や解放奴隷税などの増収を図った。このことによりローマ市民であることは単なる名目に成り下がった。市民権を付与されることを拒否する者も多かった。地租と人頭税は増額されず、帝冠税 *aurum coronarium* を繰り返し課した。彼は、216 年 2,000 人以上を収容する大浴場を完成させたり、兵士に気前良く金をばらまくなど、人気取りに奔走した。しかし 217 年、暴君となったカラカラ帝を、近衛隊長官マクリヌスが殺害し、自ら帝位につく。騎士出身で初の皇帝となった。

218年5月、東方の軍隊がエメサの神官エルガバルスを担ぎ出し、6月マクリヌス帝を捉えて殺す。東洋的専制君主として暴政をおこなったエルガバヌス帝(在位218年～222年)が、親衛隊により殺害された後、従弟のアレクサンデル・セウェルスが帝位(在位222年～235年)についた。

230年、ササン朝ペルシアのアルデシール1世(在位226年～241年)が、ローマ領土への侵略を開始した。翌年、ローマ皇帝は親征にでる。両軍は対峙することになった。

233年、そのすきをみてライン川辺境のゲルマニアでも反乱が起きた。アレマンニ族がローマ帝国内に侵入したのである。

234年、皇帝は、母親のすすめでアレマンニ族に対して賞与金を与え和解するという策をとった。しかし翌年、皇帝の軟弱な態度に怒った軍隊が、指揮官のマクシミアス(在位235年～238年)を新帝に推し、セウェルス帝を母親とともに殺害した。セウェルス朝が断絶する。マクシミアス帝は、属州のトラキア(シリア)出身の、巨漢で、たたきあげの軍人であり、兵士達の信頼を勝ち取っていた。彼から「軍人皇帝時代」が始まり、285年まで続く。「3世紀の危機」,「混乱の時代」の始まりである。彼は、蛮族の制圧に成功したが、常に辺境を軍隊とともに移動して、ローマに赴くことがなかった。彼はキリスト教徒を迫害する。

238年、アフリカで反乱が起きる。圧制に苦しんできたアフリカ人(カルタゴの都市守備隊や青年団員など)の反乱軍は、アフリカ総督アントニウス・ゴルディアヌスを脅迫して皇帝につかせる。無視されてきた元老院が、アントニウス・ゴルディアヌス1世と息子同2世を皇帝と認める。ゴルディアヌスは、ローマ元老院でも屈指の名門で、広大な所領を持ち、悠々と暮らしながら、高雅な趣味と仁徳に溢れた80歳を超えた老人であった。彼は、その無尽蔵の資産で気前良く数々の催し物を市民に披露し、信望が厚かったが、野望はなかった。しかし時代が、本人の涙ながらの皇帝就任の拒否を無視させ、彼を権力闘争の主役にたたせてしまった。ゴルディアヌス2世は、マウレタニア知事カペリアヌスの兵士たちに殺され、同1世は敗報を耳にすると自殺する。在位36日であった。大量の殺戮が荒れ狂った。カルタゴの貴族たちすべてが処刑され、財産を没収された。他の都市や神殿さらに農村まで略奪し尽くされた。4月、元老院は、急遽バルビヌスとマクシムスを共治帝として推戴するが、在位3ヶ月で近衛隊により葬り去られてしまう。その後、近衛隊が、ゴルディアヌス帝の孫にあたるゴルディアヌス3世(13歳)を擁立する。彼の治世は6年間続く。5月、セウェルス・マクシミアス帝は、近衛隊により殺害されてしまう。

241年、ササン朝第2代の王シャプール1世(在位241年～272年)がローマ領内へ侵入し始める。親衛隊長官ミシテウスの知謀で撃退する。彼の死後、後任となったアラブ人フィリップスは食料不足を引き起こし、軍隊を怒らせ、3月ゴルディアヌス3世を殺害させてしまう。皇帝となったフィリップス(在位244年～249年)は、臣民の人気を得るために、第5回にあたる「百

年祭大競技」を248年に開催した。アウグストゥス、クラウディウス、ドミティアヌス、セウェルスの4皇帝によりおこなわれ、人心をつかんできた政策であった。

249年、ドナウ方面軍が皇帝に擁立したパカティアヌスと東方で皇帝を僭称したヨタピアヌスの両者を破ったドナウ方面軍の司令官デキウス(48歳)が、今度は軍隊に強制的に擁立される。彼は、フィリップス帝を破り、パンノニア出身で初の皇帝(在位249年~251年)となる。

250年、デキウス帝は、勅令を発して、古代ローマの神々の礼拝と供儀を命じる。キリスト教徒の大迫害が始まる。キリスト教徒は、ローマの神々や皇帝を敬わず、国家社会の一致を脅かすけしからぬ輩と見なされてきた。しかし祭壇に犠牲を捧げる儀式を執り行えば、非合法的な宗教といえども寛容に認められ、追求されることはなかった。この勅令で、祭儀に加わり供儀したという証明書(小型手帳リベルスと呼ばれていた信仰証明書)がなければ、死刑になってしまうことになった。殉教の死を望む熱烈な信者もあり、その不屈の信仰操守に感嘆し、新しい改宗者も生まれた。だが、多くのキリスト教脱落者を出したことも確かである。同年、ドナウ川を越えて侵攻してきたゴート族を撃退するために親征する。同年から、疫病がエジプトから流行し、帝国全体に広がる。

251年、デキウス帝と長子が、ゴート族との戦いで戦死する。ゴート族と和約を締結し、償金の支払いで、撤退の約束をする。息子のホルティリアヌスが帝位を継ぐ。ホルティリアヌス帝が疫病で死んだ後、彼の守護者であるモエシア総督トレボニアヌス・ガルスが帝位(在位251年~253年)につく。再び侵攻してきたゴート軍を打つために、パンノニアとモエシアの属州知事であったアエミリアヌスを派遣する。

253年アエミリアヌスは、四散していた軍隊を集め、ゴート族を急襲し、撃退した。そして蛮族に貢納すべく徴収した金を賞与金として自軍に配ると、これに驚喜した兵士達が彼を皇帝に祭り上げてしまった。彼は、ガルス帝の逃亡兵には多額の俸給を出すことを触れ回させる。ガルス帝は殺害される。元老院はアエミリアヌスを新帝として認める。しかし4ヶ月も経過しないうちに、ライン方面軍によって皇帝に擁立された、属州ラエティアの司令官ヴァレリアヌスが、ローマに進軍してくる。ヴァレリアヌス帝の精強さに恐れたアエミリアヌス帝の兵士達は、アエミリアヌス帝を葬り去ってしまった。ヴァレリアヌス帝は息子のガリエヌスを西方皇帝とし、自らは東方皇帝となった。共同統治は253年から260年まで続く。この二人の治世は混乱と災厄の連続であった。ラインやドナウやペルシアの国境での帝国の状況は絶望的であった。

254年、アレマンニ族が、属州パンノニアへ侵入し、ローマ帝国領に破壊行為を加える。同年、ゴート族が、属州トラキア、モエシアに侵入する。

256年、フランク族とアレマンニ族が、属州ガリアに侵入した。

257年、ヴァレリアヌス帝は、キリスト教徒に対して大弾圧を加える。キリスト教会指導者に

供儀を要求する勅令を発する。カルタゴ司教キプリアヌスなど、多数の殉教者を出す。この頃、初期キリスト教徒の地下墓地であるカタコンベが、ローマだけでなく北アフリカ、南イタリアなど各地でつくられ、殉教者の遺品がおさめられた。ローマの衰勢に付け入り、ササン朝ペルシアのシャプール王も侵入してきた。

260年、ヴァレリアヌス帝自ら、ユーフラテス川を渡りペルシア王と戦うが、囚われてしまう。ヴァレリアヌス帝は、恥辱と悲嘆のなかで没する。その後268年までガリエヌス帝が単独で統治する。キリスト教寛容令を発し、迫害を終わらせる。帝国内で、軍隊が反乱を起こし、地方政権が成立し、帝位僭称者が続出する。30人僭帝時代の始まりである。東方の軍隊の指揮をゆだねられていた、パルミラのオダエナトゥスの妻ゼノビアは、夫の死後、実権を握り、パルミア自立を図り、シリア、エジプト、小アジアの大半を支配下においた。同年、ライン方面軍をゆだねられていたポストゥムスが自立して、ガリア帝国を興し、ヒスパニアとブリタニアを併合する。ガリエヌス帝は、国は乱れ、民衆は窮乏に苦しんでいるのに、それらを無視した、怠惰で優柔な政治しかできなかった。湯水を捨てるような浪費や豪勢のなかで日を送り、再三にわたり凱旋式をおこなった。新プラトン派の学祖プロティヌスとの論談にふけったりもした。彼は、この哲学者を寵愛するあまり、カンパニア地方のある都市跡を与え、プラトンの理想国家をそのまま実現させようとしたという話がある。打ち続く略奪と圧制により、長期にわたる大飢饉がおこっていた。それが250年から265(270)年にかけて、猛烈な悪疫を引き起こしていたのだ。ローマ市だけで1日5,000人が死亡したという。ギボンは、戦禍や疫病、飢餓、小アジアの地震(262年)などのために、わずか数年のうちに、人類の半分が死に絶えたと推算している<sup>(4)</sup>。

267年、ゴート族とヘンリ族は、小アジアへ第3回の遠征をする。アテネやコリントスなどのギリシア諸都市が略奪される。ギリシア芸術とアジアの富を傾け尽くして建てられた壮麗なエペソス神殿も喪失した。同年、ミラノで、騎兵隊長アウレオルスが皇帝を僭称する。

268年、ガリエヌス帝は、アウレオルスを攻撃中ミラノで部下に殺害され、クラウディウス2世(在位268~270年)が擁立される。アウレオルスはクラウディウス2世により暗殺される。同年、32万人というゴート族の大軍が、モエシア、トラキアなどに侵入する。クラウディウス2世は、蛮族を敗走させる。蛮族の捕虜は、奴隷としてローマ兵1人に対して1~2人ずつ配分された。1世紀のあいだ、ゴート族のイタリア侵攻をくい止めることになった。

270年、対ゴート戦争に功績のあったクラウディウス2世が、疫病でドナウ河畔で倒れる。彼の遺言で、イリュリア人の農民出身のアウレリアヌスが帝位(在位270年~275年)につく。アウレリアヌス帝は、ゴート族とヴァンダル族の侵寇を撃退し、和約を結ぶ。ドナウ川以遠の属州ダキアをゴート族に定住地として割譲することで、ゴート族と和解した。アレマンニ族、ユトゥンギ族が、イタリアまで侵寇し、略奪をする。

271年、アウレリアヌス帝が、ローマ市に大城塞を築き始める。275年に完成。イタリアをゲルマン民族の略奪から守るためである。

272年、アウレリアヌス帝が、パルミラを攻略し、東方領土(小アジア)を回復する。

274年、ガリアで270年から皇帝を僭称していたテトリタスが打倒され、アウレリアヌス帝がガリアを回復する。彼の軍事的才能により、ローマは強力な帝国として立ち直る。ゴート人の征服者という称号が捧げられる。凱旋式が、未曾有の盛儀と誇りを持ってローマ市でおこなわれた。その浪費の極みは、第3節で明らかになる。

275年、アウレリアヌス帝が、ペルシア遠征途上で、近臣により謀殺されてしまう。軍隊と元老院が、新帝の擁立をそれぞれ相手側に要求し続け、8ヶ月の空位期間を生み出す。元老院は、元老院議員名簿の筆頭者クラウディウス・タキトゥス(75歳)を擁立し、彼が即位する。6ヶ月と約20日後、軍の扱い方をめぐる心労から息を引き取る。(陰謀者により殺害された、という説もある。)弟のフロリアヌスが皇帝を僭称する。東方軍の司令官であるアウレリウス・プロブスが反旗をひるがえすと、フロリアヌス帝は兵士により殺害されてしまう。その間、フランク族、アレマンニ族、ブルグント族が、ガリアに侵入し、繁栄していた諸都市や沃野を略奪し、回復できないまで破壊する。

276年、マニ教の開祖マニが、ササン帝国の牢獄で死ぬ。マニは、ユダヤ教、キリスト教、ズルワーン教、バビロニアやイラン古来の信仰、マンダヤ教、仏教などを巧みに融合し、新宗教を創始した。マニ教は、イラン全土のみならず、ローマ帝国、中央アジアや北西インドにまで広く普及していた。アウグスティヌスが若い頃入信している。

276年から282年までプロブスが皇帝として、ゲルマン人やヴァンダル人の侵寇を撃退し、ガリア属州を奪還する。彼は、敗れたゲルマン諸邦に対して、強壯、勇敢な壮丁16,000人を選び出し、彼らをローマ兵として提供することを要求した。彼らを50人から60人の小部隊に分割し、全国各地に分散した。彼らに、土地、家畜、農具を与え、兵士としての教育を与えた。それにより辺境植民地の活性化と、弱体化した兵力の補強を実現しようとしたのである。

282年、プロブス帝は、エジプトで皇帝を僭称した東方軍司令官サトゥルニヌスの反乱も鎮圧した。同年、プロブス帝が殺害される。干拓事業に使った兵士がそのことに反感を抱き、工事現場巡幸の時、衝動的に殺害したのである。親衛隊隊長のアウレリウス・カルスが、軍隊により擁立される。彼は、帝位につくとすぐペルシアに遠征し華々しい戦果を挙げるが、翌年遠征先で他界する。カルス帝の2人の息子が帝位を継ぐ。兄のカリヌスは、285年まで西方の皇帝となった。彼は国民の人気を得るために、絢爛な競技場で豪華な催し物を開いた。豪華さでは、先帝のそれに及ばないが、企画と質では空前絶後の野獣狩であったという。弟のヌメリアヌスは、284年、ペルシアからの帰途、殺害されるまで東方の皇帝となった。



284年11月20日、軍法会議で、親衛隊司令官(皇宮親衛隊長) comes protectum domesticorum のディオクレティアヌスが、皇帝に選ばれる。翌年、ヌメリアヌス帝を打ち、帝位(在位284年~305年)につく。彼により軍人皇帝時代が終わる。混乱の3世紀を終わらせる。ディオクレティアヌス帝は、皇帝の軍事的代理人としての官僚機構を作り上げた<sup>6)</sup>。彼の支配は、マルクス・アントニヌス帝の人道主義的哲学、つまりストア的徳目である自制、人間愛、善行、適切ななふるまい、力の抑制に基礎をおくことを宣言した。彼はこのような宥和政策をとり、前帝の旧臣を引き続き用いた。マルクス・アントニヌス帝と同じように共同統治者をたてた。285年、戦友のマクシミアヌスに副帝 Caesar の称号を与え、286年、正帝 Augustus の称号を与えた。293年、ディオクレティアヌス帝が東の正帝となり、マクシミアヌスを東の正帝とし、それぞれの副帝にガレリウスとコンスタンティウスを選び、帝国を4つに分けて治める体制 tetrarchia を293年につくりあげた。これによりディオクレティアヌス帝が小アジアのミコメディア、マクシミアヌス帝が北イタリアのミラノ、ガレリウス帝がドナウ地方のシルミウム、コンスタンティウス帝がライン地方のトレウイーリーを都とした。それぞれの都では、ローマ市に劣らないような立派な大競技場、宮殿、浴場などが、短期間のうちに建てられていった。

ディオクレティアヌス帝は、ペリシア王宮に負けないような豪華絢爛さを取り入れた。外様を紫衣だけでなく、宝石などで飾り立てた。東洋風の流儀で接見し、神の子として皇帝を拜することを強要した。彼自身は、神々の父ユピテルの子と称していた。皇帝権の根元を、超自然的で神聖な神々に求めたのである。多くの宦官を威容を高める手段として寵愛した。豪華絢爛たる外様、複雑な屈従の強制により、皇帝の権力を強化しようとしたのだ。元老院をほとんど顧みず、自分が任命した顧問団の意見を参考にして政治をおこなった。元首制 principatus から君主制 dominatus に変化したのである。4帝は軍隊とともに領内を巡回することが多くなる。さらに297年、ディオクレティアヌス帝は、属州を細分して100以上に増やし、それらを12の管区にまとめた。さらに、皇帝や直属の役人による統治、つまり中央支配体制を敷いた。管区の統括者も属州の総督も、民政権だけで軍事権は持てなかった。属州総督の力を弱め、皇帝の力は強まった。辺境の守備軍と皇帝達の率いる機動軍(近衛隊)に分けられた軍隊兵力は約2倍(規模で3分の1ほど増大)となった。このような軍隊と行政機構の効率化と大規模な拡充は、財政支出の増大をともなった。地租と人頭税を結合した税制(カピタティオ・ユガティオ制)を新設して、増税策をとった。国民の不満が高まったが、賢明な節約政策により、すべての経常費が支払われても、国庫には正当な給与や非常時の支出が残されていた。292年、インフレの抑制や金銀銅貨の良質化も進めた。人口や財産の戸口調査 censio がなされ、近代的意味での予算をはじめ導入した。新しい組織のもとで帝国の国力は回復し、辺境の防備は再建された。

ディオクレティアヌス帝自身は、帝国古来の神々に対する慣習的崇敬の念を維持していたが、

彼の妻プリスカと娘ウァリウス(ガレリウス帝の後)はキリスト教に深い尊敬の念を払っていた。さらに宦官群の大物ルキアノス、ドロテウス、ゴルゴニウス、アンドレウスなどがキリスト教を信奉し、キリスト教を保護しようとした。おかげでキリスト教徒は信仰の自由を謳歌し、信徒も増加し、新教会も建てられていった。しかしこの興隆がキリスト教会の綱紀を骨抜きにした。教会内での欺瞞、嫉妬、悪意がのさばり、司祭間での高級司教職への権力争いが激化した。このキリスト教の興隆と墮落が、後の迫害を生むことになる。

286年、副帝マクシミアヌスが、ガリアにおける農民・奴隷の反乱であるバガウダエの乱を鎮圧する。翌年、ドーバー海峡地方を任ねられていたカウラシウスが自立し、皇帝を僭称し、ブリタニアからガリア北西部までを支配する。カラウシウスは293年に財務官のアレクトゥスにより殺害されてしまい、アレクトゥスも皇帝を僭称する。同じ286年、コンスタンティウス帝がアレクトゥスを倒し、属州ブリタニアの支配を回復する。同年、ササン朝の第8代王ナルセスがアルメニアに侵攻し、反撃してきたローマ軍のガレリウス副帝をカルラエで大敗させる。同年、二度にわたってエジプトで発生した反乱が、ディオクレティアヌス帝により鎮圧された。

297年、マニ教を禁圧する勅令を発する。同年、再起を期したガレリウス副帝は、ペルシア軍を破る。講和条約を結び、アルメニアに親ローマのティリダデス王が復帰し、北部メソポタミアはローマの属州となった。

301年頃、アルメニアが、キリスト教を世界で初めて国教にする。294年に司教になったグレゴリウスがティリダデス王を改宗させたからである。上からの改宗が急速に進められたが、異教の勢力は強く、改宗は進まなかった。同年、様々な製品や賃金に定まった価格(最高公定価格)を規定し、発作的価格変動とインフレを押さえようとしたが、失敗する。

303年2月23日、ディオクレティアヌス帝の勅令により、キリスト教徒に対する最後の大弾圧が始まる。帝国内すべての教会の破壊、教会財産と聖書(聖書の写本や翻訳は帝国全土に流布していた)の没収、キリスト教徒の公職者の追放、ローマ伝来の祭儀の強制などが命じられた。額面どおりに厳しくおこなわれた地域もあったが、全体的にみると必ずしも厳格におこなわれなかった。そのことは、ニコメディア皇宮からアフリカの諸都市に迫害令が伝達されるまで4ヶ月たったことから分かる。官憲も血を流さないようにしたし、信徒たちも教会の装飾品を取り払うことぐらいでごまかそうとした。しかしシリアやアルメニアで小暴動が起これると、穏健策をとり続けてきたディオクレティアヌス帝も、酷令を発した。聖職者は残らず逮捕された。304年の勅令では、ローマ伝来の祭儀の強制のために過酷な手段をとることが許された。キリスト教に対して寛容であったコンスタンティウス帝の統治する西方の属州では、迫害はおこなわれなかった。キリスト教を憎んでいたマクシミアヌス帝の統治するイタリアとアフリカでは、迫害は苛烈きわまりないものになった。ディオクレティアヌス帝は、同年11月20日、治世20年祭と盛大な歴

史的凱旋式を挙行した。アフリカ、ブリタニア、ライン川、ドナウ川、ナイル川など、それぞれの地での戦勝の記念戦利品を提供して見せた。これがローマ市がみた凱旋式としては最後のものになった。

305年5月、ディオクレティアヌス帝とマクシミアヌス帝の東西正帝が退位し、ガレリウス帝とコンスタンティウス帝が正帝になる。ガレリウス帝が統治したトラキア、アジアの属州、シリア、パレスティナ、エジプトの属州では、キリスト教徒に対する残虐な迫害がなされた。306年、コンスタンティウス西方皇帝が、正帝の称号を得て15ヶ月後の7月にヨークの宮廷で死去する。彼の子供のコンスタンティヌス1世が、副帝に擁立される。副帝だったセウェルスが正帝になる。退位後のディオクレティアヌスは、壮大・豪華なスポレート宮殿に住み、建築、園芸、造園などで過ごした。3,000人収容のディオクレティアヌスの浴場は、306年に完成する。

306年、前皇帝マクシミアヌスの子マクセンティウスが、ローマ市に対する重税に怒ったローマ市と親衛隊の指示のもと、帝位(在位306年～312年)につき、反旗をひるがえす。ローマ市とアフリカは、マクセンティウス帝の暴政と浪費により苦しめられることになる。彼はイタリアの都市の資産家を略奪し尽くし、壊滅させた。だが彼はキリスト教に寛容であったので、イタリアとアフリカの教会は再び平和を回復する。

311年4月、ガレリウス帝が、西方皇帝リキニウス、副帝コンスタンティヌス両帝の名まで添えた寛容令を発し、キリスト教信仰を容認する。6年間の悪行を悔い改めたいという反省の念からであるという。多くのキリスト教徒が、牢獄から解放されたり、鉱山労働から救出された。迫害に負けた信徒たちも、再び教会に復帰した。同年5月、ガレリウス帝が没する。同年、カルタゴ司教座をめぐり、ドナティズム紛争が始まる。序列でも財力でも西方教会第2位というカルタゴ教会での二重選挙が、紛争の原因であった。アフリカでは、穏健派と狂信的強行派が対立していた。穏健派とは、先のディオクレティアヌス帝によるキリスト教大迫害の時、聖書や聖器類を皇帝側に渡し、教会の温存を図った派閥である。狂信的強行派は、殉教を恐れず抵抗した派閥である。この年、アフリカの首座大司教である、穏健派のメンスリウスが死に、後任選挙がおこなわれたが、穏健派は、強行派のヌミディア司教団70名が到着する前に、穏健派だけで、カルタゴの司教カエキリアヌスを選んでしまった。強行派は、これを違法であるとして、講師マヨリアヌスを首座大司教に推す。しかしまもなくマヨリアヌスが没すると、313年、代わりにバガイの大物司教ドナトゥスを推す。両派、非難を投げ合い、紛争は国家的問題にまで発展した。コンスタンティヌス1世は、3年間にわたり審議し、穏健派が承認され、ドナトゥス派は追放された。しかしアフリカでの両派の対立は過激化していった。それぞれの派への改宗者は、厳重な再洗礼、再叙品がおこなわれた。だがドナトゥス派は内部抗争により分裂していった。このような紛争が、アフリカにおけるキリスト教を衰退させていった。衰退期にもかかわらず、アウグスティヌスの

母モニカのような、熱心なキリスト教徒も多くいたのだが。

312年10月、コンスタンティヌス1世は、イタリアに進撃し、マクセンティウス帝を破り、ローマ市を占領する。この戦いの時、十字架が空に浮かび、神軍がコンスタンティヌス1世を助けたと、エウセビウス司教が後に語っている。コンスタンティヌス1世は、正帝（在位312年～337年）に就任する。ローマ市在住の軍隊を全廃し、元老院やローマ市の権威を壊滅する。この頃に彼は、ソルドゥス金貨を新鑄し、通貨の安定を図る改革をする。この頃、修道生活の父といわれているアントニウスが紅海に近いコルジム山にこもり、隠遁生活を始める。

313年2月3日、コンスタンティヌス1世がミラノ勅令を発し、キリスト教を無条件で公認する。キリスト教徒の復権、没収財産の返還を規定した。キリスト教を国家統一のために利用しようとした。皇帝は、節義も道義性もなくなった時代に、ひたすら純潔博愛の倫理体系を守り、義務を喜んで遂行するキリスト教徒に注目したのである。キリスト教徒、例えばエウセビウスは、コンスタンティヌス1世をダビデの生まれ変わりとして見なし、帝権神授説を展開した。キリスト教徒は、コンスタンティヌス1世の栄達が神の栄光を増すこととして、コンスタンティヌス1世のために働き、そしてキリスト教徒の兵士は敵と戦った。蛮族の兵士たちのなかにも、キリスト教徒が多く、彼らもコンスタンティヌス1世のために勇敢に戦った。力と強制および宗教の上に皇帝権を打ち立てることができた。コンスタンティヌス1世の大軍旗、兵士たちの兜、盾には、十字の表象が輝き、この表象で勝利したと信じるキリスト教徒が多かった。さらに宮廷内の野心的な廷臣たちも、キリスト教に改宗する方が現世で有利なことをみてとり、改宗した。上流階級が改宗すると、彼らに依存する大衆までもが改宗した<sup>6)</sup>。教会内での対立をなくし、兵士を一つにまとめるために、教義の一致に関心を払うことが、皇帝に必要な。

同年、コンスタンティヌス1世とリキニウスが、ミラノで会見し帝国を分有し、共帝制をひくことを約束する。その後の5月、リキニウス帝が、正帝のマクシミアヌスをハドリアノポリスの戦いで破り、敗走させる。マクシミアヌス帝は、その数ヶ月後に、突然死亡する。ローマ帝国は、西方はコンスタンティヌス1世、東方がリキニウス帝が支配するようになった。同年、コンスタンティヌス1世は、フランク族やアレマンニ族と戦う。ゲルマン人を軍隊に編入する。

313年頃（別説では319年頃）、古来プラトン哲学の本拠であったアレクサンドリアの司祭アリウスが、キリストの神性を否定した教義「同類論」＝聖子従属説を提唱する。三位一体論争が始まった。

320年、アリウスが、アレクサンドリア司教アレクサンドロスと対立し、教会から追放される。同年、聖パコミウスが、エジプトに最初の修道院を建設する。

321年7月3日、コンスタンティヌス1世の命令により、日曜日が帝国全体共通の休日になる。同年、コンスタンティヌス1世は、異教の占卜師ハルスベクスタイに定期的に神意を伺うことを

命じる。同年、今まで主張を退けられてきたドナトゥス派に対する寛容令を発する。

324年9月18日、クリュソポリスの戦いで、コンスタンティヌス1世がリキニウス帝を破り、ローマ帝国唯一の皇帝となる。後337年まで、単独で支配し、専制君主国家の体制を確立していく。

325年5月20日、コンスタンティヌス1世が、ニケーアに帝国全土の司教たち2,048人を集め、公会議を開く。この会議で、キリストは父なる神と同じ本質を持つというアタナシウスの教義を、皇帝が支持し、それに反対するアリウス派を異端とし、その司教を追放した。(3年もたないうち、アリウス派に対して寛容の態度が示された。アリウス派自体は、数年間で18にもものぼる小分派をつくりだし、アタナシウス派に対して抵抗を続けた。)皇帝が、国家とともに教会に対しても最高統治者であることを示したのである。禁止の対象とした宗派は、アリウス派をはじめとして、サモサタのパウルスを信奉する一派(パウルス派)、予言の継続性を主張したフリュギアのモンタヌス派、悔悛の現世的効果を否定したノウァティアヌス派(この派に対する禁止を、コンスタンティヌス1世は後に悔いている)、アジアやエジプトのグノーシス派を次第にまとめていたマルキオン派とウァレンティアヌス派などの各派であった。それにマニ教も含まれていたらしい。禁止された宗派の集会は厳禁され、共同財産はすべて没収された。

326年、コンスタンティヌス1世とミネルウィナの間にも生まれた長子のクリスプス副帝を無実の罪で処刑する。この後悔の念により、コンスタンティヌス帝はキリスト教徒(罪業消滅はキリスト教しか認めていない)になり、伝来の神々を捨てた、という説もある。ファウスタの子供たちが後継者となる。

328年、アタナシウスは、アレクサンドリア司教となる。

330年5月11日、新都の開都式がおこなわれた。華やかな競技類、多額の施与、先帝の威徳に敬意を表する儀式などがおこなわれた。新都は第二のローマ、新ローマと名付けられたが、コンスタンティノープルという名前の方が親しまれた。その地は天然の要塞の地であり、蛮族の牽制、ペルシア王の監視にも容易な位置にある。さらに重要な海上の交通路を押さえられる地でもあった。周辺のトラキア、ビテュニアの沿岸地区では、ぶどうなどの豊かな実りが約束された。海は無尽蔵な魚群の宝庫であった。遠くは、ゲルマニアやスキタイの森林地帯から集められる天然物、アジアやヨーロッパの技術による生産物、エジプトからの穀物、遠くインドからの宝石や香料などが運ばれてきた。まさに風光の美、富、安全の3条件がそろっているのである。生活必需品の調達はおろか、贅沢品の要求まで完全に満足できる地であった。建物も豪華であった。従順な市民100万人のあらゆる富、労力と才能を投入した新都であった。新都の豪華な浪費で、人民を感嘆、圧倒し、帝権を強化した。

コンスタンティヌス1世も、叛徒の企図を未然に防ぐために軍事と民事の関係を分離し、軍隊

の強化を図った。歩兵騎兵兵团合わせて8名の上級将校が、帝国防衛の責任を持った。彼らの軍令下、35人の司令官が全属州に配備された。軍司令官は、裁判権や財産権の行使への介入を禁じられていたが、行政長官の権限から独立していた。相対する利害関係をもたせることで、両者が協力して叛乱を起こすことはなくなった。しかし両者が協力して公務に励むこともなくなった。コンスタンティヌス1世の安寧を保証したが、国家の活力を弛緩させた。官僚は、収賄と腐敗により、効率を悪化させていった。さらに軍隊編制を6,000人から、1,000ないし1,500人に減少させ、叛乱を防止した。宮廷軍と辺境軍とに二分する軍政も導入した。宮廷軍兵士は、皇帝の所在地に駐屯する騎兵と歩兵からなる強力な軍隊で、いつでも敵に向かって行進できる状態におかれた。そのほとんどは、ゲルマンやサルマタエの部族から徴集された傭兵であった。辺境軍兵士は、世襲的軍役の義務をおわされて国境周辺に定住された人々や退役軍人の子孫であった。厳罰をもって、彼ら兵士の敵前逃亡、蛮族の侵寇黙過、略奪などはなくならなかった。もはや義務や名誉心から兵士になる者はいなくなったのだ。

ローマ市民の兵役義務は、新兵代納金 *aurum tironicum* によって代わられた。その金で、より強健な蛮族の傭兵を雇った。奢侈に慣れた怯懦の人を兵士にするのは、利益への誘いか処罰への恐れしかなかった。帝国の国庫は、給与の増額や臨時賞与金 *dominatium* の乱発、新手当、新規特権免税の創設などにより底をついていた。有効な強制手段がとられた。武勇の報償として退役兵に与えられた無税特典の土地が、封建的土地所有の基礎を思わせるような形で漸次付与されるようになった。この土地を相続する息子たちは、成人に達すると同時に軍務につかなければならなかった。拒めば、罰として名誉や財産、時には生命までも奪われた。しかし軍務につかねばならない土地所有者も、代人を立てたり、新兵代納金という重科料を払い免除を購うか、兵器をもつ自らの右手の指を切り落とすことをして、免れようとした。結局、蛮族民を軍務につけざるをえなくなり、これが後に命取りになる。スキタイ人やゴート人、ゲルマン人などは、属州を荒らすより防衛にあたった方が儲かることに気がついた。同胞からなる補助部隊に投ずるどころか、正規軍団、宮廷軍のうちで最も輝かしい部隊にまで入隊するようになった。そして軍事的才幹を発揮して、重要な指揮権を握る監軍、司令長官、将軍まで昇進するものも多々であった。

コンスタンティヌス1世は、蛮族出身者を執政官の顕職に昇進させ、世論も快く是認した。皇帝と姻戚関係を結ぶ蛮族まででてくる。アルカディウス帝(在位395年~408年)の妃は、フランク人バトウの娘エウドクシアであった。ローマ帝国への忠誠を守る蛮族の兵士もいたが、背信の行為をする兵士もいた。コンスタンティヌス2世の頃になると、軍も宮廷も、強力なフランク族閥に支配されてしまった。そして次第に宮廷軍兵士は、都市での平穏な駐屯のなかで、都市生活の悪徳に染まり、商売に精を出して墮落するか、都市生活の奢侈の風になじみ、弱体化していった。宮廷軍兵士の三分の二の俸給や手当しかもらえない辺境軍の兵士にしても、士気は衰えるば

かりであった。

国庫歳出入の管理者には聖賜与督軍 *comes sacrarum largitionum* という職名が与えられた。すべての支出は、帝自身の施与である、ということをおしやぶる必要から付けられたのである。絶対的専制者となった皇帝は、国庫の収入を勝手に徴収、消費できた。さらに膨大な私財をも所有していた。昔からの料地もその一部であった。一部は名家からの寄進であった。しかし大部分は財産没収や課徴金という不純な手段で膨大化したものであった。これら帝室財産は帝国各属州に分散していた。コンスタンティヌス1世もカッパドキアの沃土に大なる関心を払った。その地から産する名馬を皇室専用にした。宗教的信仰の美名のもと、富裕なモナ神殿に圧力を加えたのである。このような強権発動による没収は、皇帝がおこない、さらに官僚までが皇帝の名の下におこなった。

財政は難しい状態になっていた。コンスタンティノーブルの皇宮内使用人に支払う経費だけで、全軍団を賄う経費以上の額であった。予備費はなかった。関税は廃止されることはなかった。地租と人頭税の直接税が優先された。15年ごとの戸口調査にもとづき、毎年税額と期限を示した15年期布告 *inndictio* が示された。不足の時は追加税が課された。極端な自由裁量により税額が決められ、それが苛政を生んだ。納税できない土地は放棄され、農業は荒廃していった。コンスタンティヌス1世の死後60年とたたぬうちに、イタリアのカンパニア地方の33万エーカーが、実測結果で砂漠ないし不毛耕地で課税免除の措置を受けている。395年には、貿易商、金融業者(金貸し)、自分の商品を売るときの製造業者や職人たち、農作物を売るときの小作人、商人、公娼(コンスタンティウス1世が財政難のため、はじめて娼婦に課税した)たちも4年ごとに取引税(4年季御祝儀)を徴収された。ここでも恣意的査定、極端な誅求により、商工業の衰退をもたらした。以前は皇帝や将軍の勝利をたたえる王冠金という自由寄進も、新帝の就任、皇子の誕生、副帝の任命、蛮族との対戦などのたびに取り立てられる、金貨での義務的税金になってしまった。食料の没収や徴発という手段もたびたびとられた。食料の買い占めと高価販売すらおこなわれた。民衆は、重い税金、過酷な取り立てにおしひしがれ、来世に望みを見いだそうという諦観の状態に陥った。キリスト教は、これら貧者のうちに発展した。

331年ゴート族がモエシアに侵入する。翌年、コンスタンティウス1世は、ゴート族を撃退し、同盟条約を結ぶ。

332年10月30日、コンスタンティヌス1世が、自由小作人 *colonus* の土地定着強制法を公布する。逃亡したコロヌスを連れ戻す権利を地主に与えた。

334年、コンスタンティヌス1世は、ゴート族に追われたサルマタエ族30万人に、軍役の代償として国内移住を認める。彼らは、パンノニア、トラキア、マケドニア、イタリアなどの属州に、相当面積の土地を生活本拠地として与えられた。

335年9月17日、コンスタンティヌス1世が、聖墳墓教会を献堂する。326年、キリストの墓穴が発見されるという知らせが届くと、コンスタンティヌス1世は、聖墳墓教会の建設を命じる。330年にはベツレヘムにも聖誕生教会が建設、献堂されている。同年、アレクサンドリア司教のアタナシウスが、アリウス派の策略により、ガリアのトリニアへ追放される。2年4ヶ月間の、第1回目の追放。彼の学徳と才幹の卓越さは、管区内の聖職者や信徒たちの熱烈な支持と信頼を生んだ。アリウス派が復権し、両派の抗争は続く。

337年5月22日、コンスタンティヌス1世がニコメディアの離宮で没する。ペルシア王シャプール2世との会戦が始まり、親征の途中であった。死の直前、アリウス派司教エウセビウスから洗礼を受ける。コンスタンティウス1世の時代は、蛮族の侵攻をかりうじて辺境の線で押さえ、帝国内部で、奢侈学芸の技術を次々と開発し、優雅な社会的逸楽をたっぷりと享受していた時代であった。贅沢と出費が、軍部を弱体化することにより、その恣意的横暴を抑制した。賢明なローマ法による公正と秩序がまだ存在していた。宗教や哲学からの保護も引き出すことができた。しかし彼の晩年は、貪欲と浪費という悪徳によって汚されていた。落ちた信望を、豪華なオリエント風宮廷儀礼で回復しようとしたが、失敗した。浪費の罠に落ちたのである。寵臣や使用人たちも、収奪と汚職の特権をほしいままにして富をなした。また彼は、一方でアリウスを庇護しながら、アタナシウスを迫害し、他方ニケーア公会議でくださった結論のホモシウス説を誇りとしていた。教会政策は、統一がなく軽薄であったと非難されるものであった。同年9月9日、ローマ帝国が、コンスタンティヌス1世の3人の息子のうちコンスタンティヌス2世西方皇帝（コンスタンティノープルを継承する）、コンスタンティウス2世東方皇帝（トラキアおよび東方諸属州を世襲領として受ける）、コンスタンス（イタリア、アフリカ、西イリリクムなどを正式主権者として受け入れた）のあいだで分割される。コンスタンティヌス2世の大赦令により、アタナシウスがエジプトに帰る。

338年から363年まで、ペルシアと戦う。338年、シャプール2世のニシビス（メソポタミアの要塞都市）攻囲が撃退される。

339年、シャプール2世は、キリスト教迫害を強める。彼は、ゾロアスター教を重んじた。

340年3月、コンスタンス帝は、イタリアに侵入したコンスタンティヌス2世を敗死させ、西方の支配者となる。同年、アタナシウスがアンティオキア公会議で罷免され、ローマ市に346年まで逃れる。第2回目の追放。コンスタンス帝の庇護をうける。

341年、コンスタンス帝は、異教の供儀を禁じる。神殿財産は没収され、神々の彫像類は飾りとして運び去られた。金や銀はすべて通貨に鋳直された。その主役は宦官たちであったといわれている。しかしこの略奪行為は全ローマからすればほんの小部分だけでおこなわれたにすぎず、異教礼拝は、黙認の形で盛大におこなわれていた。つい最近まで帝国の国教と定められていたこ



の宗教は、古来の習俗慣習により強く惹かれる庶民大衆から、依然として深い尊宗をうけていた。

343年、コンスタンス帝は、ブリタニアへ遠征する。

346年、コンスタンス帝の命令で、サルディカ公会議が開かれる。東方の司教94名、西方の司教76名が対立し、激論を戦わせる。双方の決議がそれぞれの属州で発表され、追認された。東方司教は分派してフィリッポポリス公会議を催し、逆にアタナシウス派を異端とする。しかしコンスタンス帝の命令で、アリウス派を異端とし、アタナシウスは復権する。

347年、コンスタンス帝は、ドナトゥス派を追放し、迫害する。アフリカの属州では、キルクムケリオネス派という蛮族狂信者集団が、ドナトゥス異端信徒たちと行動をともし、ドナトゥス派教義のために戦い、攪乱していた。村々を追われたドナトゥス派農民たちは、ガエトゥリア砂漠の周辺に集結し、抑制のきかない略奪行為を繰り返すようになった。

348年、コンスタンティウス2世は、メソポタミアのシンカラでペルシアと戦う。

350年1月、ガリアで帝位僭称者マグネンティウスの反乱が起きる。353年まで続く。コンスタンス帝は、マグネンティウスの騎兵隊長に殺害される。3月、イリュリクムで帝位僭称者ウェトラニオがたつ。彼はマグネンティウスと結んだが、コンスタンティウス2世に服従し、廃位され、小アジアのプルサに配流された。7月、帝位僭称者ネポティアヌスが、ローマ市でたつが、マグネンティウスの軍隊により処刑されてしまう。同年、西ゴートの司教ブルフィラ（アリウス派）が、聖書をゴート語に翻訳する。キリスト教はゲルマン人の間にも浸透していくことになる。この頃、地中海貿易で繁栄しているエチオピアのアクムス王国が、キリスト教を受け入れる。

351年9月28日、コンスタンティウス2世は、マグネンティウスを激戦の末ムルサで破る。その戦いで、辺境の防衛を固め、ローマ帝国の栄光をになってきた老練部隊を一挙に失い、帝国の威力を完全に消滅してしまった、というエウトロピウスの意見もあるほど死者が多かった。死者54,000人といわれている。コンスタンティウス2世は、この勝利が、アリウス派のムルサ市司教の代禱の功によるものと信じ込まされ、アリウス派を擁護していく。しかし臆病で、固い信仰心もないコンスタンティウス2世は、アリウス派の支持を二転三転する。以後公会議（アルル公会議、ミラノ公会議）をたびたび招集し、両派の論争を終結しようとしたが、失敗した。

352年、マグネンティウスは、ガリアに撤退し、翌年自殺する。コンスタンティウス2世は、単独帝となり361年まで支配する。

354年、コンスタンティウス2世は、ガリアへ遠征する。スエビ族を征服する。12月、副帝ガルスが、謀反と失政の罪で処刑さる。

354年11月13日、アウレリウス・アウグスティヌス Aurelius Augustinus は、北アフリカのヌミディア州の農業地帯の中心であった小都市タガステに、長男として生まれた。父パトリキウスは没落しつつある中産階級の地主であり、異教の神々を信仰していた。母モニカは熱心なキ

リスト教徒であった。

- (1) cf. E. Gibbon, *Decline and Fall of the Roman Empire*, edited with introduction, notes, and appendices by J. B. Bury, Methuen & Co., London, 1909, vol. 1, p. 61. 中野好夫訳, ローマ帝国衰亡史, 第1巻, 118頁。プリニウスは, 別の書物で, その半分に計算している。ギボンの時代の1ポンドは, 金113.001グラムの価値があった。
- (2) cf. *ibid.*, vol. 1, p. 101. 訳, 第1巻, 179頁。
- (3) cf. *ibid.*, vol. 1, p. 134. 訳, 第1巻, 226頁。
- (4) cf. *ibid.*, vol. 1, p. 302. 訳, 第1巻, 474頁。
- (5) この頃軍隊は, 帝国内の文明度の低い地方からでた農民(アントニウス勅法やカラカラ帝の付与, プロブス帝の政策のおかげで市民権を手にしていた蛮族の農民も多かった)と, 定住地を与えられた兵士と退役兵の子供たちに占められていた。古い上流階級は, 軍隊の指導官の地位と属州の行政官の職から追放された。皇帝すら, 低い身分の出身者が多かった。軍隊の指示により皇帝に擁立された皇帝たちは, ディオクレティアヌス帝を含めて, 皇帝の軍事的代理人としての官僚機構を作り上げた。cf. M. Rostovtzeff, *The Social and Economic History of the Roman Empire*, 2nd ed., Oxford, 1957, p. 449. 坂口明訳, ローマ帝国社会経済史, 下巻, 644頁。
- (6) ローマ市では, 年間の受洗者12,000人という数字がある。それに比例する女子供の数は別としてである。しかし彼らには, 1人当たり金貨20枚まで添え, 皇帝から白衣の下賜が公約されていたとする説もある。cf. E. Gibbon, *op. cit.*, vol. 2, p. 331. 訳, 第3巻, 259頁。

## 2. 3・4世紀の社会的混乱と経済的变化

年代順にみてきたように, ローマ帝国は3世紀の危機により変質した。M・ロストフツェフによれば, 3世紀の危機とは, 元老院を媒介として帝国を支配してきた都市ブルジョワジーに対する, 下層階級である農村の農民と都市のプロレタリアートの敵意から生まれたものである<sup>(1)</sup>。確かに紀元前1世紀頃のローマ帝国社会は, 元老院議員と騎士階級の身分である大土地所有者と実業家が提携し, 政治力を保持しながら, 物質的繁栄を謳歌した時代であった。アウグストゥス帝から始まるユリウス・クラウディウス朝(紀元前27年～紀元68年)の皇帝たちは, 帝国全体の都市ブルジョワジーに基礎をおく国家政策を展開した。強力な中流階級が, 国家のバックボーンを形成した。皇帝は, 都市生活を助成する政策を追求した。商工業と科学的農業に基礎をおくヘレニズム的都市資本主義が, 急速に発展した。共和制末期になると, 皇帝たちの, 無慈悲で残忍な恐怖政治が, 有力資産家たちを没落させていった。貴族層の巨大な富が皇帝の手中に集中していったのである。皇帝はその富を, 兵士の給与, 兵器工場, 官僚群への給与, さらに水道や軍道, 宴会などの公共事業という民衆へのサービスに使った。皇帝自身の贅沢への浪費の額も巨大であった。しかしやがて都市ブルジョワジーは, 創造的力が衰弱し, 金利生活者のような安定的で, 不活発な生活の確保に向かった。

少数の都市ブルジョワジーは、大多数の農村の農民と都市プロレタリアートの搾取の上に繁栄せざるをえなくなった。ぶどうやオリーブの栽培が各属州に拡大したことから、ぶどう酒やオリーブ油の過剰生産が起こり、イタリア農業を壊滅させた。ドミティアヌス帝(在位81年~96年)などの皇帝の命令による属州のぶどう園が破壊されたにもかかわらずである。新たな奴隷も獲得できなくなった。蛮族の侵入、ペルシアとの戦争、内乱により道路網は荒廃し、経済が縮小した。戦費調達のための重税も、たびたび課された。カラカラ帝(在位211年~217年)の時代には、通貨の急速な価値低下と急速な物価上昇がおきた<sup>(2)</sup>。皇帝たちは、財源不足を通貨の改悪で補おうとし、経済は疲弊した。農民と都市プロレタリアートの下層階級は、窮乏化していった。そして両者のあいだに敵意が生まれた。セウェルス朝(193年~235年)の皇帝も、この敵意を解消できなかった。ハドリアヌス帝(在位117年~138年)は、帝国すべての属州で都市生活を育成することにより、その危機を解消しようとした。その政策は時流に反していた。2世紀になると、軍団兵と補助軍兵は、農民から構成されるようになっていた。下層階級の熱望は軍隊により表明され、皇帝たちも支持せざるをえなくなった。ガリエヌス帝(在位253年~268年)は、元老院身分の者を軍隊の指揮官の職から排除し、元兵士だけが属州の統治者に任命されることを最初に決定した。マクシミアヌス帝(在位287年~305年)が、イタリアの都市ブルジョワジーを決定的に破壊し、没落させた。皇帝を推戴するのは都市ブルジョワジーの元老院でなく、軍隊になっていった。皇帝たちは軍隊に寄りかかり、軍隊を腐敗させ、軍隊を暴徒化し、軍事的無政府状態をつくりだした。このように3世紀の危機が生まれたのである。軍隊の皇帝推戴も、貴族階級や騎士階級のような身分の高い層により構成されていた近衛隊が推戴し、地方の軍隊がそれを承認する形から、低い身分出身の、ドナウ、シリア、小アジア、ギリシア、エジプト、ガリア、アフリカなど地方の軍隊の推戴に移っていった。235年から284年の約50年間に26人の皇帝が各地の軍隊に擁立されて出現し、そのうち自然死が1名だけであった。下層階級の兵士たちが、皇帝を決め、自分たちのための政治、経済を動かしたのである。3世紀の危機も深まった。その結果、元老院に代表される上流の貴族層は崩壊した。つまり元老院議員を代表する伝統的貴族身分の者 *patricius* と、祖先のなかに執政官 *consul* を経験した者だけが属すると見なされてきた貴族層が崩壊したのである。伝統的貴族から、侵入者、成り上がり者と軽蔑されてきた騎士階級の実業家、地方の大土地所有者の一部は、伝統的貴族が手放さざるをえなかった土地などの財産を取得し、逆に豊かになった。

そのようななか軍隊は、農民でなく蛮族が占めるようになっていった。マルクス・アウレリウス帝(在位161年~180年)の頃から、蛮人部族と同盟を結び、辺境地帯に定住させ、耕作と防衛にあたらせていた。プロブス帝も、積極的にゲルマン人をローマ帝国内に移住させた。彼らには、ローマ正規兵の給与と同額の年金を一括して払っていた。新兵代納金を支払うことでローマ

市民が兵役につかず、その金貨 42 枚で良質の傭兵である蛮族を雇う政策は、2 世紀末のセウエルス朝時代に始まり、ガリエヌス帝からの 3 世紀後半の皇帝たちが決定した。蛮族は、ローマ帝国に侵入し、略奪するよりも、傭兵として雇われ、ローマ帝国のために戦った方が利益になると判断したのである。続々と蛮族が軍団内に入って来た。彼らの強壯さを分かっていた皇帝は、軟弱な近衛隊兵士を追い出し、蛮族だけの近衛隊をつくった。蛮族の兵士でも、百人隊長、司令官など実力で出世していった。そしてイリュリア人、トラキア人、アラブ人、ムーア人、ゲルマン人、サルマタエ人が、国民の出費により外敵と戦う特別な軍閥をつくりだした。彼らも皇帝たちのへつらいや贈り物で墮落していき、皇帝に命令を下すようにまでなる。宮廷内部にまで門閥をつくり、皇帝を支配した。だが彼ら兵士の食料、衣料、武器そして給与は常に不足した。兵士さらには士官までもが勝手気ままに属州民の持ち物を取り立てた。このことが重税に苦しむ国民をさらに疲弊させた。税金を払えない農民は、土地を捨てて逃散した。逃散した農民は、盗賊となり、今度は略奪する側にまわる。人口は減少し、ますます多くの耕地が荒廃し、財政は悪化していった。通貨の改悪と通貨の膨張がしばしばおこなわれた。通貨改悪は特に 3 世紀に甚だしかった。兵士や役人への俸給は、不利な貨幣換算により現物支給がおこなわれ、彼らを苦しめた。市場価格より低い価格を押しつける、国の強制購買もさらに苦しめた。最高価格公定令がたびたび発せられた。職業組合を作らせたり、国営企業を増やしたりもした。強制と統制なくして支配体制を維持できなくなった。ローマ帝国は、崩壊状態におかれた。

この 3 世紀の危機を終わらせたのが、ディオクレティアヌス帝である。彼は次々と新政策を導入した。帝国を 4 分割し、それぞれの皇帝に防衛と行政を担わせ、効率化を高めた。同時に軍事と民政を分割し、属州総督の力を弱め、皇帝の力を強めた。彼は、専制君主政をひいた。皇帝は、立法権、行政執行権、裁判権、最高指揮権、貨幣鑄造権等を兼備する絶対君主となった。皇帝の実力の基礎である軍隊そのものの反逆と地位篡奪に対して、帝位の絶対化が必要であったからである。元老院の意見は聞かず、皇帝直属の顧問団の意見を参考に、政治をおこなった。皇帝の代理人としての官僚機構を作り上げた。皇帝の権力を強調し、服従を強制するために、ペルシア風儀礼を導入した。皇帝の身边を神のように飾り立てた。彼は、ユピテル神の体現者として統治し、皇帝の神権的権威を強めたのだ。農民大衆に基礎をおく軍隊を基礎とし、そのうえに強力な「軍事化された官僚機構」をつくりあげた軍事的君主制が、無政府状態を解消するためオリエント的専制政治の形を取り、生れたのである。

その改革を強力に押し進めたのが、コンスタンティヌス 1 世であった。彼は、293 年から副帝になった。324 年から 337 年まで単独の正帝として帝国を支配した。軍事と民政を分離した。軍隊編制を 1,000 人から 1,500 人に縮小した。辺境軍と宮廷軍（近衛隊）に分けた。宮廷軍はゲルマンなどの蛮族から構成されていた。彼の頃の、ローマ帝国の総兵力は少なくとも 50 万人、多

い推計では73万人であった。元首政初期には、30万人であったから、2倍に増加したのである。これらの膨大な軍隊の管理と、属州の数でも100を超える広大な領土の統一的統治のために官僚組織が整備された。夥しい官僚群が政治をおこなった。軍隊と強力な「軍事化された官僚機構」のもとに軍事的君主制をしいた。キリスト教を国教化し、キリスト教の権威を高め、それを利用した。皇帝位を神の恩寵に基礎づけるキリスト教的神寵理念による絶対化までおこなった。自らをダビデの生まれ変わりとした。皇帝のすべての支出は、皇帝自身の施与の形を取った。さらに彼自らの権威を高めるために、ペルシア風儀式を宮廷に導入した。コンスタンティノープルという首都の壮麗さ、宮廷内の使用人の贅沢さ、官僚たちの物々しさはすべて、皇帝の権威を高めるためにつくられたのである。皇帝による、これらの浪費はすさまじいものであった。

巨大な軍隊と官僚群の維持のため、さらに戦費をまかなうため、また浪費をするために徴税が強化された。租税の制度をみてみよう<sup>③</sup>。関税は商品別に、8分の1から40分の1であった。生活必需品は低く、奢侈品は高かった。人頭税は高率であった。貧困な市民は数人で一個の人頭と見なされ、富裕な市民はその資産に応じて数人分の人頭と見なされた。相当の生活手段を確保している市民だけが納税者名簿に記されていた。コンスタンティウス1世の時代、ある地方の人頭税該当者32,000人のうち7,000人が免税措置を受けていたという。コンスタンティウス2世の時代、ガリア地方では各1人頭当たり年間金貨25枚という重税であった。次のユリアヌス帝の仁政で金貨7枚に軽減された。平均金貨16枚約9ポンドであった、とギボンに計算している。紀元3世紀末以来カピタティオ・ユガティオ *capitatio iugatio* 制が全土にひかれた。その、農地と農業労働者に対する農業課税が帝国の財政収入の大部分を占めていた。それは、人頭税と地租を結合した税であった。この税金で、軍隊の件費、民政役人、その他あらゆる国営武器工場のような政府雇員に対するすべての種類の給与、道路・公共便を含む公共事業費、軍隊の装備までまかなわれた。軍隊への年ごとの給与 *annona* の4分の1、または5分の1にすぎない兵士賞与金をまかなったのが、それ以外の税収入であった。

その内訳は、元老院議員の大土地所有に課された所領税 *collatio oblativus*、皇帝の即位を祝うために元老議員が捧げた奉納金 *aurum oblativum*、同様の機会に諸都市の参議会員がおさめた帝冠税（皇帝の即位以外にも、王子の生誕、凱旋式などたびたび課された）、そしてあらゆる取引に対して課される取引税である。これは1%を超えることはまずなかった。相続財産税は5%であった。カラカラ帝は倍にした。特にカピタティオ・ユガティオの徴収の強化が図られた。徴税用に作られた土地台帳に登録された労働者は、その登録地からの移動を禁止された。その結果、没落して自分の土地を失った農民や、奴隷から解放されたが自己所有の土地をもたない自由人が、大土地所有者の農地を借地して耕す小作人となり、その大所領の農地に登録され、縛られることになった。逃散する者が続出したからである。大所領主は小作人を土地に縛り付けること

が、労働力の安定的確保になったので、このコロヌス制 *clonatus* は次第に普及していった<sup>(4)</sup>。ディオクレティアヌス帝による税制改革と後の皇帝たちの告示は、税収確保のためコロヌスを農奴にした、といわれている。この制度のもとで、貧富の差はさらに拡大した。小作人はますます貧困化した。特に帝国の西部では、土地を失い、小作人になる傾向が強かった。東部では、土地所有農民は、比較的有力な層を形成していた。これら農民的小土地所有者を隷属化させていった大土地所有者の最大のもは皇帝であった。皇帝領の下賜を受けた高官である元老院貴族がそれに続き、やがて教会がそれに加わった<sup>(5)</sup>。大土地所有者は、その権勢を利用し、免税や特権を享受してますます巨大化していった。この傾向は西部で強かった。さらに財政収入確保のために、身分の世襲化が国家により強制された。都市領域の徴税の責任を負わされた都市参事会員、パン焼き人、船舶輸送業者、オリーブ油商人、豚商人、自作農、コロヌス、官僚、兵士などの職業の世襲を強制し、税収の安定化を図ろうとした。大土地所有者は皇帝の奴隷となり、自分たちの所領ではそこに住む小作人や農奴の主人となった。

アウグスティヌスが生まれる頃のローマ帝国は、皇帝をはじめとした少数の資産家が大多数の貧民を搾取、略奪し、より富を蓄積していた時代である。経済の中心である農業では、コロヌス制が広まり、封建社会への移行が始まっていた。今まで人々の求心力として働いてきた都市文化が崩壊し、キリスト教がそれに代わろうとしていた。司祭や修道士たちが、新しい人間像として注目を浴びつつあった。

- (1) cf. M. Rostovtzeff, *The Social and Economic History of the Roman Empire*, 2nd ed., Oxford, 1957, p. xiii. 坂口明訳, ローマ帝国社会経済史, 上巻, vii 頁。ローマ世界の経済が、ロストフツェフのいうように「都市ブルジョワジー」の活躍する資本主義的経済なのか、ロードベルトゥスやヴィッヒャー, さらには A. ジョーンズのいうように、オイコス経済, 封建的家内経済, 農業経済なのかは論争のあるところである。参照, 弓削達, ローマはなぜ滅んだのか, 58~68 頁。本稿では, 贅沢と浪費の観点から, ロストフツェフの書を参照する。
- (2) 1 世紀には, 約 8.5 ペンスに相当し, 2 世紀にはわずかしか下落しなかったデナリウスは, 3 世紀の中頃には 4 分の 1 ペニーにも値しないほどになった。エジプトの小麦の価格は, 1・2 世紀 1 アルタバにつき 7 ないし 8 ドラクマで安定していたが, 2 世紀末には 17 から 18 ドラクマに騰貴した。このように通貨の品質低下と物価上昇が, 国家を破産させていった。cf. M. Rostovtzeff, *op. cit.*, pp. 470-471. 下巻, 671 頁。
- (3) cf. E. Gibbon, *Decline and Fall of the Roman Empire*, edited with introduction, notes, and appendices by J. B. Bury, Methuen & Co., London, 1909, vol. 1, pp. 175-176, vol. 2, p. 210. 中野好夫訳, ローマ帝国衰亡史, 第 1 巻, 286~292 頁, 第 3 巻, 86 頁。弓削達, ローマはなぜ滅んだのか, 56~57 頁。弓削達, 末期ローマ帝国の体制, 23 頁, (岩波講座, 世界史 7, 中世 1)。
- (4) 332 年コンスタンティヌス 1 世はコロヌス土地定着強制法をしいた。コロヌスは, 西部では「原籍に縛られた者」*originales, originarii* と呼ばれ, 東部では「ケンススに縛られた者」*censibus adscripti, censibus adscripticii* と呼ばれた。コロナトゥスが中世の農奴制の先駆である。この頃からローマ帝国の社会が, 中世封建制へ向けて変質したのである。cf. M. Rostovtzeff, *op. cit.*, p.

332. 訳, 下巻, 737 頁。A. H. M. Jones, *The Later Roman Empire 286-602*, Basil Blackwell, Oxford, 1973, vol. 1, pp. 796-801.

- (5) 3世紀, 元老院身分は没落していったが, その一部は, 国家における特権的地位を利用した収賄と腐敗により裕福になっていった。彼らはその金を, 横奪した広大で肥沃な土地に投資した。4世紀には, 小君主にも似た大所領を形成するものまで現れた。都市で生活することを諦め, 大きく美しい防衛設備を備えたウィラを農村に建て, そこに一族と奴隷と, 武装した被護民クリエンテスからなる従者団と, 何千人もの農奴と従属民に取り囲まれて住んでいた。彼らの荘重な様子は, 帝国の主人となった蛮族すら感銘を与えた。これらの少数の, 略奪物の上にあぐらをかいている怠け者と, 略奪され窮乏化していく人々とに二分化していった。cf. M. Rostovtzeff, *op. cit.*, p. 530. 訳, 下巻, 746 頁。弓削達, 末期ローマ帝国の体制, 24 頁。

### 3. 3・4世紀の浪費の状態

アウグスティヌスの生まれた時代の浪費の主役は, 皇帝であった。皇帝は, 絶対的富と権力を示すために, 凱旋式, 宮殿, 公共建設などに浪費の花を咲かせた。大土地を所有する資産家も, 皇帝のような浪費に憧れ, 実行した。またキリスト教が公認される頃になると, 教会の建物が宮殿のように絢爛豪華になり, 司教の生活が皇帝並みの豪華さで構成されるようになった。貧者の献金で, 豪勢な浪費をするようになったのである。本稿では, 皇帝の浪費を中心にみていくことになる。

浪費に結びつく, ギリシア時代の気前のよさや鷹揚という道徳は, 紀元前3世紀と紀元前2世紀に大いに展開された。そしてローマ時代の紀元1・2世紀には顕著に復活している。1世紀全体を通じ, また2世紀前半には, 数においても規模においても増大している<sup>(1)</sup>。都市ブルジョワジーである資産家が, 公共建設の費用, 競技の費用, 飢餓の時の食料の施し, 神殿の祭事などの費用を惜しみなく提供した。そして, 政務官, 神官, 様々な団体の長と保護者, 属州会議の役人と神官などの義務を自発的に引き受けた資産家も多数いた。都市ブルジョワジーの富が着実に増大し, 帝国全体に散らばっていたことを示しているのである。

その例を挙げておこう。シリアの統治官を務めたセウェルスという富豪は, 114年から115年のトラヤヌス帝の大遠征のとき, 冬のあいだずっと巨大な軍隊の食料と宿舎を提供した。117年のその軍隊の帰路, 騎士身分の特別な官吏が同じことをおこなっている。166年と167年には, エフェソスの大富豪が, 帰途の皇帝軍を歓待した。238年にアフリカで反乱が起きた時, 無理やり皇帝に擁立されたアフリカ総督アントニウス・ゴルディアヌスの気前のよさは際だっていた。彼は, ローマ元老院でも屈指の名門で, 広大な所領を持ち, 悠々と暮らしながら, 高雅な趣味と仁徳に溢れた80歳を超えた老人であった。彼は, 大ポンペイスが住んでいたというローマ市の大邸宅を所有していた。そこは戦利品や絵画の装飾でも有名であった。彼は, 私財を投じて数々

の催しをおこない、市民にも解放して、皆で剣闘士の演技などを楽しんだ。特に彼が造営士 aedilis を務めていた時は、ほとんど毎月のように宴会が繰り返された。カラカラ帝とアレクサンデル帝の時に選ばれた執政官時代には、遠くイタリアの主要都市でも同じことがおこなわれた。浪費に関する鷹揚・気前のよさという徳を備えた老人であった。その気前のよさが、彼を皇帝に擁立させ、自殺させたのである<sup>(2)</sup>。

ヘロデス家の鷹揚さも見事であった。アテネの將軍ミルティアデス、アテネの伝説的王ケクロプスの直系子孫という名家のユリウス・アッティクは、零落のどん底に落ちていた時、古屋の床下から莫大な埋蔵財産を発見した。当時の法律では皇帝の物になるところ、公正なネルヴァ帝は受け取ることを拒み、「利用法が分からなければ、乱費するがよい」と命令した。ユリウスは、その大部分を公共のために使った。息子ヘロデスのためにアジアの自由都市の長官職を獲得するために、残りのわずかだけ使った。ヘロデスが長官の時、トロイア地方の水道建設費の不足分 300 万ドラクム（ギボンの計算では約 10 万ポンド）以上を自費でまかなった。わずか 4 年でアテネに建てた、縞白大理石の競技場も有名である。長さが 600 フィート、全市民が収容できる規模である。亡き妻レギラを記念して寄贈されたアテネの大劇場は、見事なものであった。建材はすべてレバノン杉、精巧を極めた彫刻が隙間なく建物全体に施されていた。さらにはコリントス地峡のネプチューン神殿の装飾、コリントス市の劇場、デルフォイの競技場、テルモピュレーの公衆浴場、イタリアのカヌシウム（今のカノッサ）の水道などにも、彼の鷹揚という徳目がみられる。その他、エピルス、テッサリア、エウボイア、ポイティオキア、ペロポネソスなどの住民も恩恵を受けた。現在でもギリシア、アジアの諸都市に残る碑銘文には、彼を保護者、後援者として感謝の念が表されているという。それでも彼の財産は尽きることがなかった<sup>(3)</sup>。2 世紀のローマ帝国では、ローマ市以外の属州の都市でも、競技場、寺院、劇場、柱廊、凱旋門、浴場、水道などが、次々と建てられ、街は華麗に飾り立てられていた。皇帝をはじめとした資産家たちが、鷹揚さを示すため、公共物に対する浪費をしていたのである。

実は浪費という気前のよさを要求したのは、人民たちであった。皇帝により食料と娯楽（パンとサーカス）を与えられる権利を、ローマ市民は捨てなかった。皇帝たちも、見せ物、穀物と金の追加供与、何十万人のための宴会などを市民に提供し、住民の気分を穏やかに保ち、皇帝を支持する世論が形成されることを欲した。3 世紀頃になると、ローマ市を良好な状態に保つための費用に追加された、この世論を形成する費用は莫大すぎて、元老院の財政（元老院直轄属州からの直接税）ではまかないきれず、皇帝の膨大な財産からまかなわれた。皇帝は、ローマ帝国最大の土地所有者であった。皇帝は、エジプトを私有地として支配し、帝国全土に散財する農地、鉱山、工場などを皇帝領として所有した。財産没収や遺贈により財産は確実に増大した。その財産目当てで死刑を課する皇帝もいた。賭金を返すためだけに、資産家名簿から、賭金に見合う額の



資産をもつ者を勝手に選び、死刑に処した皇帝もいた。戦利品の最大部分は皇帝が自由にした。租税は皇帝に集中した。不足のときは特別税を課した。この資産により皇帝たちは、凱旋式や競技場で確実に熱狂的歓迎を受けることができたのである。また皇帝は、自己の権力の基盤である軍隊、特に近衛隊の支持を確実にするため途方もない乱費を強いられた。皇帝の権力は軍隊にあり、軍人皇帝時代には新しい皇帝の指名は軍隊の権利となっていた。給与を増額し、褒賞金を気前良くばらまくことが、軍隊の強さを引き出し、皇帝の支持を確実にした。

浪費は、皇帝の権威を飾り、強調するためにもなされた。皇帝の代理人としての役人の浪費ぶりをみてみよう。専制独裁的な皇帝の宮廷がアジア風の虚飾威容に侵されてしまうと、ローマ人の質実剛健さがなくなり、虚飾的威容を誇示する儀式や形式が重要視され、厳しい階位職制がつくられてきた。皇帝から奴隷まで、すべての階位が細心をきわめた厳密性で規定され、それぞれの権威がひどい繁文褥礼をもって顕示された<sup>(4)</sup>。多人数かつ複雑に増えた各役職のもつ機能を明示した公文書には、一目瞭然とその権威が分かるよう、例えば各皇帝の肖像、凱旋用戦車、豪華な絨氈をかけて4本の蠟燭で照明された卓上の勅令集、支配する属州の象徴的図形、麾下に属する各軍団の旗旗、呼名などの飾りもの類が、巧妙に描き込まれていた。そしてこれら官職を示す標象類は、常時彼らの接見室に掲げられていることもあれば、行列の先頭に掲げられて進んだりもした。服装からはじめて装飾品、行列等々、いわば一挙一動が、皇帝の代行者としての深い畏敬の念が払われるよう工夫されていたのである。執政官の叙任の儀式の時、彼らは金糸銀糸の刺繍入り、高価な宝石までちりばめた紫衣の長袍に身を包み、元老議員服をつけた文武頭官たちの追従を受け、皇宮から中央広場まで行列を組んで行進した。このような国家的行事が、各首都の劇場や、大競技場などで数日間にわたっておこなわれた。毎年4,000ポンドに達する黄金(ギボンによれば16万ポンドの価値)が、湯水のように使われた。この儀式がおこなわれた後は、優雅な私生活にもどり、何も職務をはたす必要がなかった。富の浪費以外の何ものでもなかった。

最後に皇帝自身のすさまじいまでの浪費の有様をみてみよう。

ギボンが「知的快樂に対する趣味を欠いた最初の皇帝」と記しているコンモドゥス帝の浪費からみてみよう<sup>(5)</sup>。彼は、国政を無能の寵臣に任せ、放蕩にふけた。彼の日々は、全属州から集めたあらゆる階層の美女300人、同じく美童300人と後宮内で、荒淫破倫に過ごすことだけであった。教養的なものはいっさい毛嫌いし、俗悪きわまる娯楽、たとえば円形競技場でのスポーツ、剣闘士の試合、野獣狩などに興じた。檻から一度に追い出された100頭の獅子は、皇帝の手から放たれた100本の投げ槍により、1本のはずれもなく殺された。疾走するダチョウや巨象も彼の槍から逃げられなかった。莫大な費用をかけてエチオピアやインドなどから連れてこられたキリンなどの珍獣奇獣も殺された。彼は自らをヘラクレスと称し、彼がつくらせたメダルや多くの彫像類に、彼のヘラクレス然の姿が残っている。恥ずべき最大の愚行は、皇帝自ら剣闘士のセクト

ル(兜と剣と円形楯で戦う役)として戦い、735回も勝ったということである。彼は当時高名なセクトルであったパウルスの名前で呼ばれることを喜んだ。その記録を公式行事の記録に残し、剣闘士に与えられる国家基金のなかから法外な額の取り分まで受け取っている。そのため国民は新税まで負担させられた。彼の浪費と凶暴性により、彼の愛妾と寵臣たちに暗殺されてしまう。彼の浪費は、ただ自分の快楽を増すだけのものであった。他の皇帝の、人民を喜ばせ、人民と共に喜ぶ形の浪費ではない。逆に人民を苦しめることに快楽を感じる形の浪費であった。

274年におこなわれたアウレリアヌス帝の凱旋式も、浪費の極みであった。その凱旋式は、未曾有の盛儀と誇りを持ってローマ市でおこなわれた。まず象20頭、大虎4頭、そのほか北方、東方、南方などあらゆる国々から集められた200頭を超す珍獣の行進から始まった。次は円形競技場での残忍な娯楽にきょうされる1,600人の剣闘士たち。続いてはまたアジアの富、おびただしい被征服国の兵器や旌旗類、シリア女王の愛用品というすばらしい什器や衣装類。そうした戦利品の数々が実に整然と、またときには巧みな演出の小混乱すらみせて進んだ。さらにエチオピア、アラビア、ペルシア、バクトリア、インド、シナなど遠い国々からの使節たちも、それぞれ豪勢珍奇な盛装を凝らして参加し、大ローマ帝国の名声と実力を立証してみせた。各国から贈られた祝い品の数々、とりわけ目を惹いたのは、多くの都市が感謝を込めて贈ったは夥しい黄金の冠、これらすべてを皇帝は公開した。

さらにその後長々と続くのは、ゴート人、ヴァンダル人、サルマタエ人、フランク人、ガリア人、シリア人、エジプト人等々、すべて心ならずも随従させられている夥しい捕虜。これだけでも皇帝の連勝ぶりを立証するに十分であった。それぞれ民族ごとに独自の名札がつけられていた。たとえば戦場で捕虜となったゴート人女兵士10人には、アマゾン族の呼称すら与えられた。最も衆目を惹いたのは、僭帝テトリクスと女王ゼノビアであった。テトリクスは、その息子と共に、ガリア風ズボンにサラセン色の短上衣、そして上には紫衣という扮装。ゼノビアも、美しい肢体に黄金の手かせ足かせをはめられ、頸にも同じく黄金の重い鎖を巻かれ、奴隷の1人がやっと支えた。全身宝石づくめ、重みにたえかねほとんど倒れんばかりの有様で、壮麗な戦車の後をとぼとぼ徒歩で歩かされた。すぐ後に一段と豪華な、オダエトゥスとペルシア王の戦車が2台続いた。いよいよアウレリアヌス帝の凱旋戦車が、4頭の大鹿(あるいは4頭の象)にひかれて現れた。そして最後尾に、元老院、人民、および軍部などのお歴々が続いた。あまりにも長蛇の列であったので、始まりは夜の引き明けであったのに、遅々たる進行ぶりは、夕方9時になっても、まだカピトリアヌス丘ユピテル神殿まで辿り着いていなかった。皇帝が皇宮に帰還したのは、日もとっぷり暮れてからであった。祝祭はまだ続いた。演劇、大競技場での競技、猛獣狩、剣闘士たちの試合、模擬海戦など、延々と続けられた。群衆の歓喜、感嘆、感謝が一大歓声として沸き上がるなかの行進であった。軍と人民にはたっぷりの臨時賞与が贈られた。皇帝の栄光を記念す

る公共施設が、次々と新設された。東方からの戦利品は、大部分がローマの神殿に寄進された。カピトル神殿をはじめとしてすべての神殿が金色燦然と輝いた。太陽神殿だけでも、15,000ポンドを超える黄金の寄進を受けたと、ギボンは記している<sup>(6)</sup>。

カリヌス帝の催し物は、豪華と浪費さでは空前絶後であった<sup>(7)</sup>。彼は国民の人気を得るために豪勢な催し物を開いた。プロブス帝(在位276年～278年)の催し物より豪華であったという。プロブス帝は、根こそぎ引き抜いた夥しい大木を大競技場に移植し、鬱蒼とした大森林に形取られた。最初の日はその中に1,000羽のダチョウと、1,000頭の牡鹿と、1,000頭の猪と、1,000頭の牝鹿を放して、市民に自由に捉えさせた。翌日は市民の前で、100頭の巨大な獅子と100頭の豹と300頭の熊を屠殺した。3日目には、皇帝自身がしたように300組の剣闘士たちを死ぬまで戦わせた。その数こそ少ないが、カリヌス帝の動物狩りの動物は、珍獣ばかりであり、その企画も並みはずれて豪華であった。まず20頭のゼブラがその優美な姿で市民の目を楽しませた。10頭の大鹿、10頭のキリンは、30頭のアフリカ・ハイエナやインド虎と並んで好対照を与えた。ナイル川の犀やカバ、32頭の巨象等々の怪力に市民は驚愕した。この猛獣狩がおこなわれたティトゥス帝建設の円形競技場は、驚愕の豪華さであった。燦然たる景観の円形競技場(長径560フィート、幅467フィート)の外側は、大理石で覆われ、多数の彫像で飾られていた。内部を形成する巨大な凹型傾斜面には、60ないし80列の座席が設けられていた。それらすべて大理石造りで、そのうえにクッションを敷き、8万人以上の観客を収容できた。64の出入り口から、身分に応じた指定席に混乱なく着くことができた。柱廊は金箔張り、観客の階層別を隔てるしきり壁には高価な宝石づくめのモザイクが施されていた。観客の便宜や満足に役立つものはすべてそろっていた。縫い合わせた深紅の巨大な天幕やいろいろな色の絹の天幕が、自由に出し入れでき、雨や直射日光を防いだ。空気は絶えず噴水仕掛けで浄化され、快い香水の香りまで漂っていた。什器調度類は、ことごとく金銀、さては琥珀づくめであったという。猛獣を防ぐための金網は、すべて黄金の針金製であった。建物の中央部である舞台の下にはパイプ網がひかれ、舞台は多様に変化した。果樹と樹木におおわれた高い山風につくられた舞台の底から噴水が空高く吹き出し、観客に香水の雨をまき散らした。その舞台が人工的に洞窟のように開き、野獣が吐き出され、野獣狩りがおこなわれた。深い海のように水が満たされた舞台では、多数の軍船が浮かび戦った。そこには海豹などの海の怪物で満たされてもいた。すぐに舞台は乾かされ、剣闘士たちが戦う。最後に、流された血の上に朱砂と蘇合香がまかれ、全員のための盛大な宴会が催され、その日一日の幕が下りた。一日中8万人以上の観客の歓呼、延臣の阿諛が、動物と剣闘士の悲鳴と交差していた。ギリシア神話の想像の魔法楽園であるヘスペリデス楽園が、地上に出現したかのごとくであったという。

ディオクレティアヌス帝は、4皇帝にそれぞれの都をつくることを許した。それぞれの都は、

ローマ市に劣らないような立派な大競技場、劇場、造兵廠、宮殿、浴場、柱廊、城壁などが、短期間のうちに次々と建てられていった。官僚も4倍になった。つまり浪費を4倍にしたことになる。さらに君主制をひいたディオクレティアヌス帝は、新しい形の浪費を導入した。今までの浪費は、パンとサーカスにより人民を喜ばせ、人民を皇帝に近づけ、味方にするという形であった。しかし君主となったディオクレティアヌス帝は、人民より高い位置に自分を置き、人民を跪かせ、服従させるという形の浪費をした。人間でなく、神の位置に自分を高めるための浪費であった。そのために彼は、ペリシア王宮に負けないような豪華絢爛な儀典を取り入れた<sup>6)</sup>。以前の皇帝の衣裳は、軍の最高司令官を象徴する紫衣だけだった。狂気の沙汰として非難を受けたカリグラ帝の王冠といえども、広いリボンに真珠をちりばめたものにすぎなかった。ディオクレティアヌス帝の豪華きわまる長袍は、眩いばかりの金襴の絹服。靴にまで高価な宝石がちりばめられていた。さらに皇帝権を強化するために、人民から離れていった。以前の皇帝は、同胞市民と打ち解けて話し合うことができた。今や宮殿に通じる各大路は、様々な警備隊に属する保安隊員で厳重に守られていた。内部の各部屋では、宦官たちが目を光らせていた。やっと臣下として接見を許されると、いかに高位の人でも、東洋風の流儀で地上に平伏し、跪いて皇帝の前に進み出て、紫衣の裾に接吻するという、神の子として皇帝を拜することを強要された。多数の宦官を、自らの威容を高める手段として寵愛した。浪費を極めた豪華絢爛たる外様、複雑な屈従の強制により、皇帝の権力を人民の上に置き、皇帝権を強化しようとしたのである。

彼は治世20年を迎えると、盛大な歴史的凱旋式を挙行了。アウレリウス帝やプロブス帝のそれとは盛大さでは見劣りのする凱旋式であった。まずアフリカ、ブリタニア、ライン川、ドナウ川、ナイル川など、それぞれの地での戦勝の記念戦利品を展示して見せた。その後に型破りの飾りものが進んだ。皇帝が征服した諸州の風景や山河を描いた絵画類、捕虜となった女王や子供たちの肖像画が皇帝の戦車の前を次々と運ばれた。自らの力を具体的な絵画に表して、市民に示し、帝権を納得させ、強めようとしたのである。ローマ市民が見た凱旋式はこれが最後となる。

330年5月11日に開かれた新都コンスタンティノーブルの豪華な浪費は、ローマ帝国の富と労力と才能を投入し尽くしたものであった。そこは、風光の美、富、安全の3条件がそろい、生活必需品の調達はおろか、贅沢品の要求まで完全に満足できる地であった。その地に建った施設も豪華であった。コンスタンティヌス帝は、新都建設には現在の建築家だけでは数も不足し、技術も未熟であることに気づき、各属州の役人たちに学校をつくることを命じた。恩賞や特典の好餌までにおわせ、すでに高等教育を受けている優秀な青年たちに建築学の研究と実習の再教育をおこなわせた。そのうえで集めうる限りの工匠たちを総動員して完成にあたらせた。両側の出入り口が凱旋式アーチになっている広場を望む柱廊には、夥しい数の彫像が並んでいた。広場の中央には高さ20フィートの白大理石の台座の上に、120フィートを超える高さの円柱が立ち、そ

の上に巨大なアポロン神像が載っていた。その青銅像はコンスタンティヌス1世自身に擬してつくられていた。

新都建設から100年ばかり後に記された記録を参考にすると、カピトルと呼ばれた学問の府が1、大競技場が1(長さ約400歩、幅約100歩という壮大なもので、両発着点の間にはずらりと彫刻や方尖塔群が林立していた)、劇場が2、公衆浴場が8、自家浴場が153、柱廊が52、倉庫が5、水道あるいは貯水池が8、元老院の議場や法廷として使用された大ホールが4、教会が14、宮殿が14、大きさにおいて、美観において、無数の平民たちの住居とははっきり区別できる館が4,388という数字をあげている<sup>9)</sup>。皇宮の壮大な建造物は、ローマ市のそれにも劣らぬ威容を備えていた。付属の小宮殿や、庭苑、柱廊などを合わせ、広大な地域を占めていた。帝室からも建設に対する250万ポンドの抛出があった。その建物を飾った装飾品は、ペリクレスやアレクサンドロス大王時代の名匠たちの手になるものばかりであった。ギリシアやアジアの諸都市に建てられていた戦勝記念碑、宗教的崇敬の対象物、神や英雄、聖者や詩人らの見事な彫像などが、貪欲な専制君主の虚栄心により徴発され、運ばれてきたのであった。その他、住民たちの利便幸福に役立つ施設はすべて備わっていた。コンスタンティノーブルの市民に対して、かつてローマ市民に対しておこなわれていたと同様、ぶどう酒、油、穀物、パン、現金、必需物資の規則的配給がおこなわれていた。皇帝の気前のよさは、貧民市民により歓迎された。しかしそれは、エジプトのような勤勉精励な属州農民の犠牲において、遊惰安佚の市民を養うだけに終わった浪費的行為であった。

ギボン、この彫像などの有様をみた史家ケドレヌスの「ここに欠けているものは、これら見事な記念物が表現せんとした偉大な人物たちの、肝心のその魂それだけのようである」という言葉を引用して、当時の人々の魂がなくなり、政治の面でも信仰の面でも、隷属状態に墮していることを明らかにしている。コンスタンティヌス1世自身、夢で見たこの地の守護神の神意により首都としたことを公言している。人民の度肝を抜くような豪華で高い建造物を建て、見事な彫像を並べ、そこに宗教と軍事力を絡ませ、人民を圧倒し、支配するための浪費であった。後に、蛮族の王がこの都に連れてこられ、あまりの絢爛豪華さに圧倒され、皇帝に心から服従するようになった、という話もある。

コンスタンティノーブルの皇宮内でもすさまじい浪費がおこなわれていた<sup>10)</sup>。使用人に支払う経費は、全軍団を賄う経費以上の額であった。それぞれの係で1,000人の奴隷がいて、それぞれ豪勢な部局に配置されていたという。職務の細分化がおこなわれていたからである。皇帝が着用する服装ごとに別グループの奴隷がおり、彼らによりその服装の管理・手入れがおこなわれていた。宮廷平服係、凱旋式用完全礼装係、観劇服係など。皇帝が使用する食器類についても同様であった。普通の皿・鉢類、コップ類、銀器類、金器類、水晶器類、貴石象眼器類などそれぞれ

に固有の係りの奴隷群がいた。宝石類も種類ごとに奴隷群がいた。皇帝の化粧係にも、入浴係、マッサージ係、整髪係、ひげ剃り係の各種の奴隷群がいた。謁見に関しても、カーテン係、室内係、名呼び係という一つだけの仕事を果たす奴隷群がいた。料理や宴会では専門化はさらに進んだ。毒味係、竈の火夫、普通の料理人、パン焼き係、煉粉菓子作り係、甘菓子作り係、献立係、宴会侍立係り、酌をする係、それぞれの料理を専門に切り分ける係、給仕、片づけ係り、コップの種類ごとに皇帝に手渡す係、吐いた物を拭き取る係、客の食べ残りを集める係までいた。セネカが非難しているように、食事は「食べるために吐き、吐くために食べている」状態であった。不正によってかき集められた富は、むだに浪費されていった。芸人奴隷も専門化した。合唱奴隷、オーケストラ奴隷、くるくる踊りまわるダンサー女奴隷、ふざけ小びと、ばか話芸人、道化師などが宴会をさらに華美にした。宦官は、夏日の羽虫も同然だった。高給を取る名前だけの役職も多く、それが売られた。途方もない巨大世帯が浪費にふけた。俸給や給与も増大する一方であった。高額の設定給以外に、高価な臨時収入があった。理髪師の例を取ると、毎日20人の召使いと20頭の馬を養っていける額であったという。彼らは賄賂も要求した。強欲貪欲なにわか成金たちは、途方もない浪費にふけた。絹の長袍には金糸の刺繍、食卓には山のような珍味がつままれた。私邸が、昔の執政官の荘園の規模の広さであった。皇帝の贅沢のために、召使いが贅沢をしたのである。二重の浪費である。

コンスタンティウス1世自身の晩年も、貪欲と浪費という悪徳によって汚されていた。皇帝の威容を支えるための多数の建造物、宮廷、様々な祝賀行事など、莫大な支出を要した。唯一の財源は重税であった。寵臣たちも、収奪と汚職の特権をほしいままにして富をなした。この悪弊の端を開いたのはコンスタンティウス1世だといわれている。共和制時代には、2名だけであった財務官が、彼の時代には8名、20名、40名と増えていった。信望評価は失われていった。皇帝は、威容意義を張るようになった。老帝は、当時一流の美容師たちにより丹念につくられた混色の髪、高価な新型王冠、おびたしい宝石、真珠の類をちりばめた襟輪や腕輪、五彩まばゆい絹の長袍、それも精巧を極めた金糸花模様を刺繍したもの等々を身につけていたという。それを肖像画に描かせた<sup>(11)</sup>。浪費により、神のように敬われ、恐れられることで帝権を確実にしようとしたが、むなしい手段にすぎなかった。浪費は卑しい人々しか満足させず、それもすぐ忘れられる。また浪費の満足は限りなく高まり、要求も拡大する。晩年のコンスタンティウス1世(大帝)ですら、このような浪費の平行から逃れることはできなかった。

最後に今までの浪費の類型を見てみよう<sup>(12)</sup>。大資産家や皇帝が、同胞を喜ばせ、それを自分の喜びとする道徳的義務感から、公共建造物や宴会などに、自分の資産を浪費してきた。鷹揚、気前のよさという徳として賞賛された、ギリシア時代からの浪費の形である。3世紀頃になると、最大の資産家である皇帝だけしか浪費できないようになる。皇帝権を強化するために浪費がおこ

なわれた。まず皇帝の浪費も、市民とともに喜び、市民の協力を得る形をとった。軍人皇帝時代になると、軍隊の支持を得るために、人民を犠牲にして、兵士たちに褒賞金の供与、給与の増額という贅沢をさせる浪費になった。人民を苦しめ、ひたすら自分だけの快樂を追求するだけの浪費をする残忍な皇帝もいた。専制君主制をひいた皇帝は、神のような浪費をする存在として、兵士や市民の上に立ち、彼らを跪かせる形の浪費をした。これらの形が、アウグスティヌスが生まれるまでの浪費の類型である。

- (1) cf. M. Rostovtzeff, *The Social and Economic History of the Roman Empire*, 2nd ed., Oxford, 1957, p. 149. 坂口明訳, ローマ帝国社会経済史, 上巻, 216 頁。
- (2) cf. E. Gibbon, *Decline and Fall of the Roman Empire*, edited with introduction, notes, and appendices by J. B. Bury, Methuen & Co., London, 1909, vol. 1, pp. 189-190. 中野好夫訳, ローマ帝国衰亡史, 第1巻, 308-311 頁。
- (3) cf. *ibid.*, vol. 1, pp. 49-51. 訳, 第1巻, 102-105 頁。M. Rostovtzeff, *op. cit.*, p. 149. 訳, 上巻, 216 頁。気前のよさで最も有名な人として、リュキア人のオブラモアス、スパルタのユリウス・エウリュクレスとその子孫をあげている。
- (4) cf. E. Gibbon, *op. cit.*, vol. 2, pp. 169-200. 訳, 第3巻, 33-74 頁。
- (5) cf. *ibid.*, vol. 1, pp. 101-105. 訳, 第1巻, 179-185 頁。
- (6) cf. *ibid.*, vol. 1, pp. 333-334. 訳, 第2巻, 52-56 頁。これら皇帝に関する内容は、『皇帝列伝』*Scriptores Historiae Augustae* からとられている。この史料は、書かれた年代も作者も不明であり、信頼できない内容も多いという。たとえば、ゼノビアは、ローマへの連行中に死亡したという説もある。彼女の子孫は繁栄したという説もある。しかし時代の感情と雰囲気を表現している一級の史料である。cf. M. Rostovtzeff, *op. cit.*, p. 436. 訳, 下巻, 626-627 頁。
- (7) cf. E. Gibbon, *op. cit.*, vol. 1, pp. 370-372. 訳, 第2巻, 105-108 頁。モンテーニュも『エッセー』第3巻第6章に、浪費に関するエッセーがあり、そこで驚愕する浪費の例として引用している。
- (8) cf. *ibid.*, vol. 1, pp. 412-413. 訳, 第2巻, 162-164 頁。宦官については, cf. *ibid.*, vol. 2, pp. 260-261. 訳, 第3巻, 159-161 頁。
- (9) cf. *ibid.*, vol. 2, pp. 156-168. 訳, 第3巻, 18-32 頁。ギボンには、その記録の出典を明らかにしていない。
- (10) cf. *ibid.*, vol. 2, pp. 444-445. 訳, 第3巻, 426-429 頁。クジャクや牡蠣などの食卓の山海の珍味に関しては、弓削達, ローマはなぜ滅んだのか, 120-132 頁を参照せよ。
- (11) ギボンは、その肖像画を先帝のそれと比べて、「彼の場合は妙に柔媚情弱の趣をさらに加えた」と評している。cf. *ibid.*, vol. 2, pp. 216-217. 訳, 第3巻, 97-98 頁。
- (12) cf. Christopher J. Berry, *The Idea of Luxury*, Cambridge University Press, 1994, pp. 84-86.

## 《Summary》

## The Thought of Augustinus on Luxury (1)

*By Akira FUKISHIMA*

Augustinus was the thinker who connects ancient Roman times and the Middle Ages. In this article, I investigate the social confusion and the forms of luxury of the Roman Empire until 354. I draw a picture of luxury of Prefecture Herodes Atticus, Emperor Commodus, Emperor Aurerian, Emperor Carinus, Emperor Diocletian, Emperor Constantius I and their servants.